

[シリーズ]

PISA型読解力 について考える

第4回

山梨県総合教育センター

山梨県総合教育センターでは、2007年度、小学校、中学校、高校のさまざまな教科において、PISA型読解力を育成する授業の研究を行った。今回は、高等学校の古文の授業例を中心に、各段階における成果と今後の課題をうかがった。

● 小学校・中学校・高等学校のさまざまな科目で ● PISA型読解力育成授業を実施

山梨県総合教育センターでは、これからの国際社会を生きる日本人にとって、「言語を媒介とする本質的理解と高い相互理解を目指していく伝達受容能力」が重要であるとの考えから、2004～2006年度の3年間にわたって、「論理的思考力」と「相互向上コミュニケーション能力」の育成に焦点を当てた「国語力向上」研究を行った。2007年度は、この能力がPISA型読解力で求められる力と共通することから、「PISA型『読解力』育成」に焦点を当てて、小学校・中学校・高等学校各段階における教科指導研究を行った。教科は2007年度の研究グループ構成員の専門教科であり、指導研究は前任校等の協力を得て取り組んだ。また、実際に導入しやすいことを前提に、新しい教材を作るのではなく、基本的に教科書をベースに、情報の取り出し、解釈、熟考・評価、表現の過程を組み込んだPISA型読解力の授業の構築を目指した。

● 小学校算数科では意見の練り合わせを通して ● 定義に気づかせる

小学校の算数科では教育指導部長の丸山一彦先生が、数学的に事象を見たり、考えたりする力を育てるため、PISA型読解力の「読解のプロセス」と問題解決型の学習過程との関連を図ることを試みた。今回の研究では算数科における「読解力」を、

- ①文章や数、式、図、表、グラフから正しく必要な情報を取り出す力 [情報の取り出し]
- ②取り出した情報から筋道立てた解答を導き出す力 [解釈]
- ③求めた解答が正しいか、より簡潔な方法や明確な方法はないかなど、学習の狙いや思考の過程に即して考える力 [熟考・評価]
- ④解決に至るまでの考え方を文章や式、図などで論理的に表現する力 [熟考・評価]
- ⑤自分の感じたことや考えたことを他者にわかりやすく表現する力 [論述 (表現)]

ととらえて、授業を構成した。研究授業は、第4学年の「三角形—二等辺三角形や正三角形の定義や性質—について学ぶ」(全8時間)である。

授業では、まず、児童が色によって長さの異なる3色のストローを用いてさまざまな三角形を作り、特徴に基づいて仲間分けをする [情報の取り出し]。仲間分けした理由(分類の観点)を児童同士で話し合い、意見の練り合わせ [解釈、熟考・評価、表現]を通して、児童自身に二等辺三角形、正三角形の定義に気づかせることを目的とした。

丸山先生は、「情報の取り出しである仲間分けのとき、形の大小や角の尖り方、類似した形など、辺の長さだけでなく多様な分類の観点を見つけ出す。一人ひとりの考えを大切にしながら、辺の長さの相等関係に着目した分類へと導くことの難しさを感じた」と言い、さらに「異なる視点を否定してしまうと、児童の考える力を摘んでしまいかねない。例えば、低学年では考えることの楽しさを、中学年では多様な考えを認め合うことのよさを、高学年では数学的に考える面白さをより多く感じさせたい。そのことで、児童の数学的な見方を育てたい」と学年に応じた指導が必要と指摘する。

解釈、熟考・評価と表現については、児童自身が考える時間と集団で話し合う場面を設定。友達に自分の分け方を説明したり、友達の分け方と比べたりすることにより、二等辺三角形、正三角形の定義を学ぶことができた。今後の

課題としては、児童同士で考えを練り合わせることを促す工夫や、教科書以外の身の回りのものをテキストとして活用することなどが挙げられた。

● 中学校家庭科では、複数の非連続型テキストを ● 関連づけて読み取る力を育成

中学校では、技術・家庭、音楽、保健体育の3つの実技教科で研究授業が行われた。家庭科は教育指導部・研修主事の清田礼子先生が、第2学年の「食」の学習で、「これからの食生活」について全3時間の授業計画を作成、実施した。栄養や食品に関する基礎知識の学習と基礎的な調理実習を終えた段階で、資料をもとに自分の食生活を振り返り、課題を発見し、食生活に関する自分の意見をまとめ、発表する授業を行った。

授業にあたって、まず生徒に食生活に関する実態調査を行った。清田先生が起床時間、就寝時間、朝食の摂取などの項目ごとに集計結果をまとめ、生徒に考察させた。生徒は自身の食事の量やバランス調査を行い、教師から提示された資料をもとに自分の食生活の問題点を考え、意見をまとめ、クラスで話し合う活動を行った。さらに、日本の食糧自給率や食品の容器とゴミ問題等、食生活全般の課題を発見し、今後どう行動すべきかを考えてまとめた。

「生徒は資料から情報を取り出し、考える力があることがわかりました。しかし起床時間のグラフと朝食摂取状況のグラフを関連づけて考えるなど、複数のグラフを多様な視点から検討し、それらのかかわりを見つけることは難しかったです。今回は生徒一人ひとりが自分の食生活と向き合い考える授業が中心でしたが、今後は、自分の意見を発信する『表現』の位置づけを明確にしたいと考えています」(清田先生)

清田先生は、今回の授業でPISA型読解力における「連続型」「非連続型」のテキストの活用を意識したと言う。授業後のアンケート結果から、授業の資料として生徒の実態調査の結果を使ったことにより、資料を身近に感じて、わかりやすく活用しやすかったと感じていたことが、判明した。今後の課題としては、生徒同士の活発な意見交換を促すことが挙げられる。

● 高校では、古典を再評価することを通し ● 自国文化である古典への興味を喚起

高校は、国語、理科、家庭、工業、道徳の5つの教科・領域等において、PISA型読解力育成の研究授業が行われた。

国語を担当した教育指導部主幹・研修主事の橋田雅春先生は、第2学年の古文の授業で、兼好法師の『徒然草』第137段「花は盛りに」を題材に、授業計画を作成、実施した。

現代文ではなく古文でPISA型読解力育成の授業を行った理由につ



橋田雅春先生

いて、橋田先生は、同県が山梨県普通高校2年生4クラスを対象に行った「教科・科目に対する学習意欲に関する調査」において、古典は約20%の生徒しか「興味がある」と回答しなかったことを挙げる。古典に興味がある生徒が少ないのは、古典の授業は訓詁注釈が中心で作品自身をじっくりと味わう要素が少ないためであった。そして「国際社会を迎えた今日、自国の伝統的な文化に興味関心を持つことは大切」という思いから、生徒の興味関心を促すために、古典でPISA型授業を実施することにしたのである。

さらに橋田先生は、「古典は評価の定まったものという認識があり、これまでの古典の授業では、筆者の主張を批判的に評価するような学習は行われず、なぜ古典として生き残ったかを深く考え、再評価することはありませんでした。これからの社会では自分の考えを持つことが必要ですから、この力を養う上でも古典でのPISA型授業は有意義だと考えたのです」と語る。そして「花は盛りに」を取り上げたのは、同作品は兼好の自然観照の仕方について賛成、反対いずれかの立場をとりやすく、クリティカルに読み、議論するのに格好の題材であるためだ。

● 概念化できるまで考え抜くことが ● 深い視点からの評価と議論を促すポイント

授業は、全9時間のうち5時間目までを、従来の授業に共通する語彙や文法の学習、口語訳、筆者の主張の読み取りを行い、6～8時間目までをPISA型読解力育成の授業に当てた。<表1>は6～8時間目の指導計画である。具体的に6時間目以降の授業の展開を見てみよう。

6時間目はまず、これまでの学習で理解した兼好の自然観照法について、生徒同士の意見交換を含めてまとめた後、「咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見どころ多けれ」など本文中に挙げられている兼好の花や月などの美しさについての12の主張を、一文一文丁寧に読みながら学習プリントに整理する[情報の取り出し]。そして兼好の物の見方に賛成か反対かについて自分の意見をまとめることを次回までの宿題とした[1回目の熟考・評価]。

7時間目は、なぜ兼好は、花は盛りだけでなく咲き始めや



<表1> 「花は盛りに」の指導計画(6~8時間目を抜粋)

時間	ねらい(身に付けさせたい力)	学習活動	読解のプロセス
6時間目	C 「読むこと」のア 「花は盛りに」の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、整理したりする。	1 学習プリント②を使って、記述内容を整理する。 ・前時までの学習で完成したプリント②の□に、兼好の見方と一致するものに○を、違うものに×をつけて区別し、兼好の主張を整理する。 2 それを参考にして、学習プリント①の③欄に兼好の自然観照法についてまとめる。 3 兼好の自然観照法について、自分の意見をまとめる。(宿題として課す)	情報の取り出し 解釈その1(1) 熟考・評価(その1)
	C 「読むこと」のエ 文章を読んで、ものの見方、感じ方を広げたり深めたりする。		
7時間目	C 「読むこと」のア 「花は盛りに」の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、整理したりする。	1 兼好の自然観照法についてまとめる。 ・本文中の12の実例をもとにして、兼好の自然観照法について一般化した表現でまとめる。(この抽象化の作業を、プリント②を参考にして生徒自身の力で行う) <47ページ資料2参照> 2 兼好は、なぜその観照法をよしと考えるのか、その理由を推論する。 ・ペアで話し合い、理由をまとめる。指名して発表させるなど徹底して考えさせる。 3 2でまとめたものを発表し、意見集約をする。(全員の生徒に発表させる) <資料3> 4 ペアで話し合った片方の生徒が、相手のとらえ方のどういう点に共感を持ったか、また、自分のとらえ方とどこが違うか、共通点と相違点を説明する。	解釈その1(2) 解釈その2
	A 「話すこと・聞くこと」のイ 目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりする。		
8時間目	C 「読むこと」のエ 文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりする。	1 兼好の自然観照法について、賛成または反対の立場から最終的な自分の意見をまとめる。(2回目)	熟考・評価(その2)
	A 「話すこと・聞くこと」のイ 目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりする。 C 「読むこと」のエ 文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりする。	2 まとめたものを発表する。 3 その意見に賛同する者が、どういう点に賛同するのかを説明する。 4 学習プリント③に載っている、兼好の考えに対する先人の批評を読んで理解する。	情報の取り出し

咲き終わりが良いと言ったのか、月は満月だけでなく木の梢や雲に隠れた月が良いと言ったのかを、前回のプリントをもとに各例に共通する主張を整理し、生徒同士ペアで話しあって理由をまとめる、指名して発表させるなどしながら兼好の主張を3点に整理する学習を行った【**解釈その1**】。

しかし、兼好の主張を抽象化するこの作業は、かなりの困難を伴った。そこで、生徒に、①繰り返される表現に注目してキーワードを探しそれを使ってまとめる、②まとめたものが「何を言おうとしているのか」「要は何か」の答えになっているか、を考えさせることにした。生徒全員を指名し、「本当にそう思うのか」「結局はどういうことを言っているのか」という質問を繰り返し、生徒を追い込みながら、兼好の主張を抽象的な概念としてとらえさせた。その結果、生徒は<資料2>のように兼好の主張を3点にまとめることができた【**解釈その2**】。「物事は抽象的な概念にすることができて初めて、本当に内容を理解したと言えるのです。教師はすぐに答えを言いたくなりますが、そこは我慢が大切です」(橋田先生)

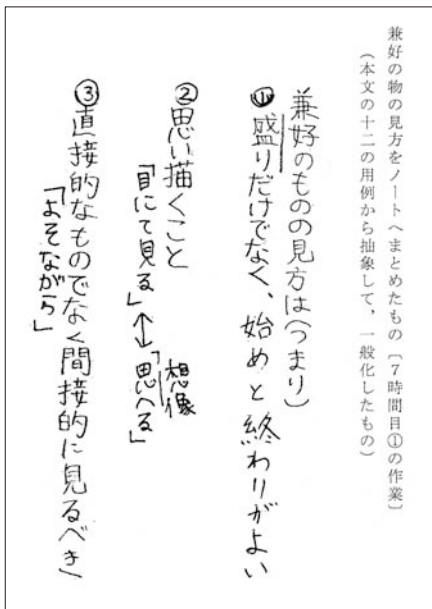
橋田先生は、「兼好の考えを深く理解した上でないと、生徒自身の熟考・評価が表面的になってしまい、議論の中

身も薄くなりますので、解釈が非常に大切です」と語り、解釈は読解のプロセスの中で一番重要なものであると指摘。実際に<資料3>のように生徒の解釈は深みを増している。

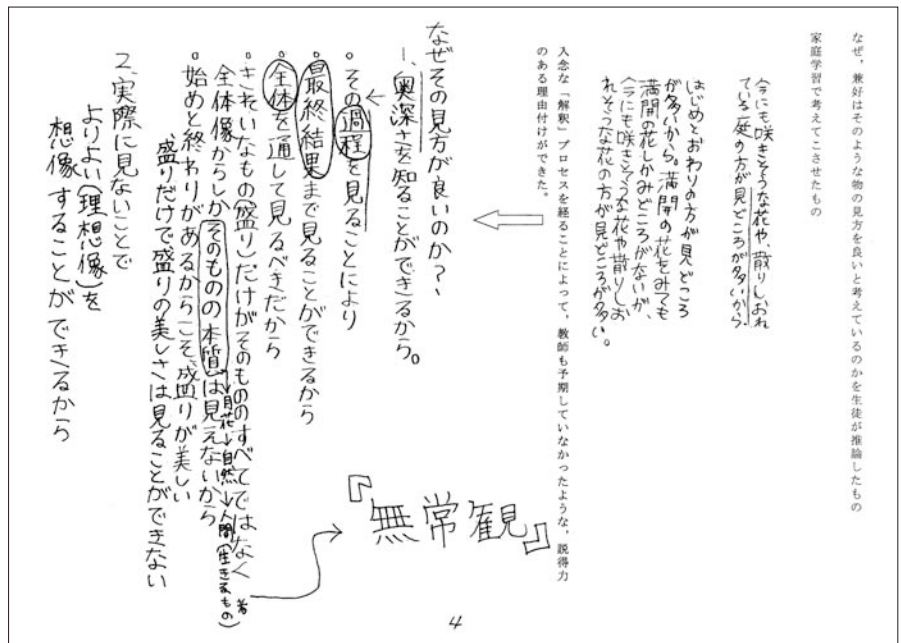
8時間目は、7時間目で学習した兼好の主張を踏まえて、文中に根拠を求めながら再度自分の意見をまとめ、発表させた【**2回目の熟考・評価、表現**】。このとき、6時間目の終わりでは兼好の意見に反対派だった生徒の中に、中間派や賛成派へと意見を変える生徒も見られた。最後に、9時間目に行うディバートの導入として、室町時代の僧でもあり歌人でもある正徹と心敬による、兼好の美意識について賛同した文章と、本居宣長が『玉勝間』で述べている兼好の美意識に対する批判を読み、さらに現代の国文学者である西尾実や永積安明の意見も紹介して、古来より兼好の主張には賛否両論があることを学習した。これはディバートの動機付けとディバートでの議論を深めるためである。「こうした補助教材を探すのは大変でしたが、歴史上の文人と同じことをするというので、生徒たちはがぜん盛り上がりました」(橋田先生)

9時間目は、兼好賛成派と反対派に別れてディバートを

<資料2>兼好の物の見方をノート
へまとめたもの (7時間目1の作業)



<資料3>生徒が家庭学習で考えた推論と、「解釈」プロセスを経た推論



実施。賛成派と反対派それぞれ5～6名の班を作り、2グループに分かれて討論することにした。ディベートは10分間でグループの意見を集約し、その後なぜ賛成か、反対かを各グループ10分ずつ発表。続いて25分間、意見の応酬を行った【表現】。ディベートでは深い解釈を行ったかいて、賛成派は無常観を通して自然を観る立場から、反対派は自然の美しさを素直に直感的に感じようとする立場から、活発な議論が行われた。

授業終了後の古文の学習意欲に関するアンケート調査では、「かなり興味がわいてきた」と回答した生徒が24%、「少しは興味がわいてきた」が52%にのぼり、教科そのものへの興味が高まったことがわかった。また、「作者の意見や考えを意識して読むと、文章の内容がすんなりと頭に入ってきた」「もう少し文法や古語を覚え、自分で大体の要約ができるようになってからこのような授業を行って欲しい」といった感想が見られ、PISA型授業が古典の理解を促し、文法や古語の学習の重要性に気づかせる役割を果たしたことがうかがえた。

● 学校をあげての取り組みと
● 不正解に対する恐怖心の除去が鍵

このように、小学校・中学校・高校でPISA型読解力育成授業を行った結果、どの段階でも共通して、児童・生徒は意見を交換しながら合意を形成することが苦手だということが判明した。丸山先生は、小学校では「発達段階や学級実態にもよりますが、集団思考の場面では、考えの発表

はできても、考えを練り合わせるころまではいかないこともあり、『話型モデル』（『私は～と 생각합니다』）を作成し、実践して、話型を広げることで討議の活発化を図った」と言い、清田先生は「中学生はノートやプリントに自分の考えをまとめて書くことはできますが、思春期にさしかかると生徒同士で意見を言わなくなるようです」と、中学生特有の理由を挙げる。

橋田先生は、「小学生のときに活発に手を挙げていた生徒も、学年が上がるにつれ発言しなくなるのは、生徒に間違ったことを言うのが恥ずかしいという恐怖心があるため」と指摘する。「それは、これまでの授業で、教師が1つの正解を要求してきたからで、正解が1つではなくお互いの意見を言い合うPISA型読解力育成の授業は有効です。また、1つの正解を求める場合であっても、児童・生徒が間違った答えを言った場合、教師はすぐ次の生徒を当てるのではなく、『なぜそう考えたのか』と聞き直し、考え方のよいところや、つまづいたポイントを指摘するなどフォローすることが大切です。それがないと恥ずかしいという思いだけが残ってしまい、発言したくないという気持ちが強まってしまうのです」

丸山先生、清田先生、橋田先生が共通して指摘するのは、『表現』については、全ての授業をPISA型にする必要はないが、小・中・高校において学校全体でPISA型読解力の育成を目指すという意識を持ち、授業や授業以外の学校生活においても、物事をクリティカルに考え、自分の意見を持ち表現する機会を積極的に設けること」の大切さである。